

茂漁川は恵庭市の中心を流れる漁川の支流として、鮭の産卵する豊かな小川であったが、周辺農地を洪水から守るため、1950年代から河川の直線化と三面工法による改修が行われた。その後急速に市街化が進み、治水安全度が低下したため、1986年に改修に着手し、1990年には道内二番目のふるさとの川モデル事業に認定され、「素顔の水辺づくり」をテーマに多くの多自然型工法を取り入れ、自然環境に溶け込んだ緑豊かな川に生まれ変わった。また、リバーウォークなどの水辺整備が行われ、自然と共生するまちづくりが進められている。

◆ 再生のポイント

- 潤いのある水辺空間の創出
- 旧川保全
- 水辺整備

◆ 茂漁川概要

茂漁川は、恵庭市西方の台地に源を発し、東流して恵庭市街地を流れ、漁川に合流する一級河川である。アイヌ語の「モイチャン」（鮭が産卵する小川の意）に由来し、かつては鮭が遡上する豊かな川であったが、急速な市街化が進み治水安全度が低下し、度重なる水害から、1986年より改修工事に着手された。

自然林の残る旧河道は、都市環境の貴重な財産として次代に継承していくために、積極的な保全を図る必要があった。河川が本来有している生物環境に配慮し、自然景観の保全・創出を目指している。



◆ 再生のために実施した事業

【潤いのある水辺空間の創出】

自然と共生するまちづくりをめざし、1986年に策定された「水と緑のやすらぎプラン」において、市街地中心部を流れる茂漁川は、治水・利水機能だけでなく、まちに潤いを与えるかけがえのない水辺空間と位置付けられ、景観対策や親水性に配慮しつつ拡幅工事が着手された。

【旧川保全】

防災工事の際のショートカットにより取り残された旧河川敷地では、旧河道を水路として整備を行うなど、本流との生態的なつながりに配慮している。水路に通水した後、整備前の生態調査では確認できなかったカワセミが、水路の出口で小魚を捕食することが頻りに目撃されるようになった。これは旧河川敷地にあるハンノキやヤチダモ、オニグルミなどの広葉樹に寄生していたヨコバイやハムシ、蛾の幼虫が落下して水路に流れて小魚の餌となったり、落葉落枝がベッドを形成し、爆発的に水生昆虫が増え、魚影が濃くなったことに起因するものと推察される。

【水辺整備】

沿川に残る旧河道にはせせらぎ水路、遊歩道を設け、膨らみのある河川空間を確保した。また、管理用道路(リバーウォーク)にはウッドチップを敷設しているためクッションが良く、朝夕は高齢者の散歩、日中は学生のランニングコースにもなっているなど、人が途切れることのない利用状況であり、福祉や教育の場としても活用されている。



整備前



整備後